法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

背教者 千々石弥解瑠(ちぢわミゲル)

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社会志林
(巻 / Volume)
59
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
258
(終了ページ / End Page)
227
(発行年 / Year)
2012-07
(URL)
https://doi.org/10.15002/00021133

背教者　千々石弥解瑠（ちぢわミゲル）

宮永孝

はしがき
一　天正遣欧少年使節の派遣事情
一　帰国後の千々石弥解瑠の動静
一　千々石はなぜ棄教したのか
一　遣欧使節の文化史的意義
一　伊東満所と千々石弥解瑠の墓
あとがき

はしがき

天文十八年（一五四九）にスペインの宣教師フランシスコ・ザビエル（一五〇六～五三）が来日し、キリスト教を伝えて三十年後――天正七年（一五七九）ごろのわが国のキリシタン改宗者の総数は約十五万、全国の教会堂の数は二百ヶ所、パードレ（司祭）とイルマウン（修道僧――司祭の下に位置）の数は八十余人、[1] イエズス会の施設（会堂、住院など）で養わねばならぬ者の数は五百人に達した。

しかしながら、キリスト教の隆盛をよそに、イエズス会の事業を維持してゆくには、資金が欠乏しており、法王からの寄附だけでは不十分であった。このやっかいな問題を解決するには、ヨーロッパからの物質的な援助が不可欠であった。[2]

天正十年正月二十八日（一五八二・二・二〇）、九州の三侯――大友・有馬・大村の三氏の代表者四名が、ローマ法王のもとに派遣された。い

までこそだれでも容易にヨーロッパに出かけることができるが、およそ四百数十年まえ、極東の小島日本からヨーロッパに赴[3]くことは破天荒の試みであり、この四人こそ日本最初の渡欧者であった。

俗に天正少年使節とか天正遣欧使節と呼ばれた四名の氏名と出自は、つぎのようなものであった。

正使……伊東満所[4]（一五七〇？～一六一二）日向の都於郡の出身。大友宗麟（一五三〇～八七）の姪の子の従兄。[5]ポルトガル語でDom Mancioという。Domは王や貴人の名の前につける尊称。

副使……千々石弥解瑠（一五六九？～一六三三）千々石清佐衛門直員のこと。大村純忠の甥、有馬鎮貴の従弟にあたる。島原半島の高来郡千々石町の釜蓋城で千々石直員の子として生まれた。[6]のちイエズス会を脱会し、大村喜前に仕えた。Dom Miguel。

随員……原丸知野（一五六八～一六二九）大村領波佐見村の出身。大村純忠の義兄弟、原中務の息子。Dom Martinho。寛永六年（一六二九）マカオで病死。

随員……中浦寿理安（一五六九？～一六三三）大村領中浦の出身。寛永十年九月十九日（一六三三・一〇・二一）助祭をへて司祭に叙せられたが、長崎の西坂において〝穴吊り〟の責苦をうけ殉教した。[7]Dom Juliam [Juliano]。

この空前の大旅行を立案したのはだれであったのか。この使節派遣のことを発意したのは、ナポリ王国のイエズス会士アレッサンドロ・ヴァリニヤーノ（一五三九～一六〇六、マカオで没）であった。

かれはイエズス会東インド巡察師として、天正七年（一五七九）マカオより古参で博学のロレンソ・メシア師とオリヴェリオ修道士をともない、[8]島原半島南端の港――口之津（現・長崎県南東部）にやって来た。巡察師というのは、イエズス会の総長から任命され、各地の布教状態を視察し報告したり、[9]イエズス会士と総長とのパイプをつなぐ任務を負った神父であった。

ヴァリニヤーノの日本の第一印象は、まったく異質な世界に来たということであった。日本の布教が期待したとおりにおこなわれず、まったく

誤った方法で行なわれていることであった。何よりも心を痛めたのは、ヨーロッパから来た宣教師たちが、日本語に通じていないことであった。[10] 言語が不通ということは、日本人との意志の疎通がよくとれないことを意味した。当時、日本布教長の地位にあったのはカプラール神父であったが、同人と日本人の宣教師、信者らとの関係が悪化していた。

カプラールは、日本人を低級な人間とみなし、日本修道士とポルトガル修道士を同一に扱わなかった。食事や睡眠、衣服を異らしめた。ヨーロ

千々石弥解瑠　Dom Miguel

伊東満所　Dom Mancio

原丸知野　Dom Martinho

中浦寿理安　Dom Juliam

教皇グレゴリオ13世より贈られた短衣を着た四使節。（*La Première Ambassade du Japon en Europe 1582-1592*, Sophia University, 1942）より。

アレッサンドロ・ヴァリヤーノ（1539〜1606）の肖像。

イエズス会のメスキッタ神父。

ッパ人の会話がわからぬようにするため、ラテン語やポルトガル語の学習を許さなかった。のちにカプラール神父は失脚し、コエリヨ神父がその後任となるや、日本人との信頼回復につとめた。

ヴァリヤーノは、日本の布教を、日本事情に通じた日本人に当らせることにし、天正八年（一五八〇）三月から五月にかけて、北有馬に神学校（セミナリオ）の建設をはじめた。のちに少年使節として渡欧する伊東満所は、この学校に入学した。[11]

ヴァリヤーノの野望は、極東においてキリスト教国をつくることにあり、目的の完遂にうむことはなかった（J・M・プラガ）。[12]

一　天正少年使節の派遣事情

ヴァリヤーノがヨーロッパに使節を派遣する計画を立てたのは、長崎を出帆する一ヵ月半ほど前のことらしい（ヴァリヤーノ『日本巡察記』）。使節を送りだす理由であるが、いくつか考えられる。一つの大きな目的は、日本人にヨーロッパを実見させ、キリスト教のありがた味を知らせ、またヨーロッパ人に親しく日本人をみせ、日本布教の関心を高めることにあった。とくにローマ法皇やポルトガル、スペイン王などに、日本の公子の口から経済的援助を請わしめれば、イエズス会の布教事業が容易になる可能性が期待できた。[13]

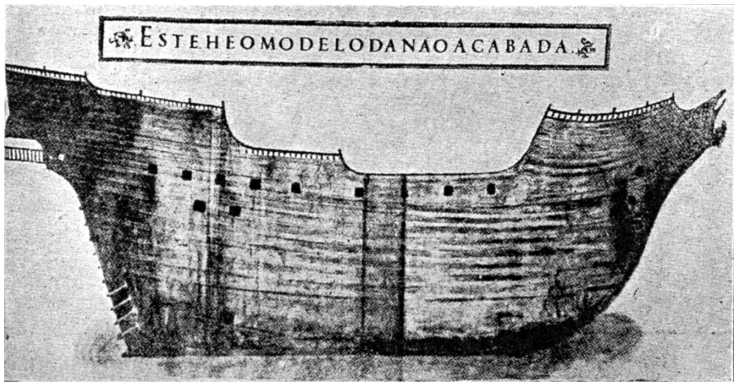
また少年使節らにヨーロッパを見聞させることによって、日本に西欧文化を移植させる基礎をつくり、キリスト教を受容する社会的、文化的基盤を形成するにあった。[14]

要するに一方ではヨーロッパの王侯やイエズス会士らに日本人を見せ、日本の教化に努めさす。他方、ヨーロッパにおいてローマ教会のすばらしさ、諸侯の勢力や威厳、キリスト教国の広がりなどを実見した使節らに、帰国後同胞にそれらについて語らしめるにあった（Le R. P. de Crasset: *Histoire de L'Eglise du Japon*, tome premier, 1689, p.440）。

以上の理由から、遣使にはありふれた者ではなく、身分の高い者、大名の近親がその適任であった。また使節は長途の航海や気候風土の変化に

も耐えうる者でなければならぬから、年長の日本人は不適格であり、少年に限る必要があった。

ヴァリヤーノは、大村純忠や有馬鎮貴と何度も逢っているから、遣使のことを話し合ったことはたしかなようであるが、大友宗麟に至っては、遠縁の伊東満所のことをまったく知らず、かれが携えた書状を書かなかったことはたしかである（『日本巡察記』）。けっきょくヴァリヤーノは、キリシタン大名の大友、大村、有馬ら三侯の縁者から使節四名を、さらに日本語教師ジョルジ・ロヨラ（イエズス会に入った最初の日本人、一五六〇年肺結核によりマカオで病死）、通訳として日本語を能くするディオゴ・デ・メスキッタ（一六一四［慶長一九］一一・四――十善寺浜の小屋で死亡）、他に氏名不詳の従者二名、計八名えらんだ。一行はヴァリヤーノを案内人として、天正十年正月十八日（一五八二・二・二〇）ポルトガル人イグナショ・リマの帆船に乗り長崎を出帆した。



17世紀の大型の帆船（nau）の図。使節一行はこのような船に乗って渡欧した。（岡本良知著『天正14年大阪城謁見記』）より。

帰国したのは、天正十八年七月二十一日（一五九〇・八・二〇）のことであり、八年半ぶりに故国に帰ったとき、十代の子どもは二十三、四歳の青年になっていた。

往還の主なる旅程をしるすと、つぎのようになる。ヴァリヤーノに伴なわれた少年使節らは、長崎を出帆するとき、同地のキリシタンらは皆これを見送った（『ダニエルロ・バルトリ編ヤソ会史――アジア第二部 日本第一編』）。

一五八二・二・二〇（火）……長崎を出帆。

（天正10・1・18）

三・九（土）……マカオに到着。長崎出帆後の二日間は快適な航海であったが、やがて暴風に遭い、食物を摂ることができなかった。苦難は五日間つづいた。この間、一瞬も眼をとじることができなかった。やがて嵐がおさまった。マカオではサン・パウロ学院に約十ヵ月滞在し、この間にラテン語・日本文字・声楽・楽器などを学んだ。

一二・三一……同地を出帆。

一五八三・一・二七……マラッカに到着。

司教、知事および市当局の厚い待遇をうけた。

二・四……同地を出帆。暑気と無風のため、インド洋を横断することに難儀した。乗客の中から病人が出た。伊東満所は熱病と赤痢にかかった。メスキッタも高熱に悩まされた。水も乏しくなり、船長みずから乗組員に少量づつ分配した。

セイロン島の南方を通過したが、同島には寄港しなかった。航海士が航路を誤ったためにトリシャンデュールTrichandurで船をすて、陸路キロンQuilonへむかった（三・三一）。

四・五[15]……コーチン（インド南部の港町）に到着。

四・七……トリシャンデュールですてた船、コーチンに廻航された。

コーチンには九月末まで滞在し、この間に使節らは学課をつづけた。ヴァリヤーノは、使節一行がコーチンに滞在していることをインド副王ドン・フランシスコ・マスカレニヤスに伝えた。

一〇月上旬……同地を出帆。

一〇月中旬……八日間の航海ののち、アジアにおけるローマ[16]ともいうべきゴア（インド南西部の港町、ポルトガルの東洋貿易の拠点）に到着した。

ゴアに到着したのち、使節一行はサン・パウロ学院（コレジオ）の神父やイルマウン、インド副王らから大歓迎をうけた。一行がこの港町に到着したとき、すでに悲しむべき知らせが届いていた。

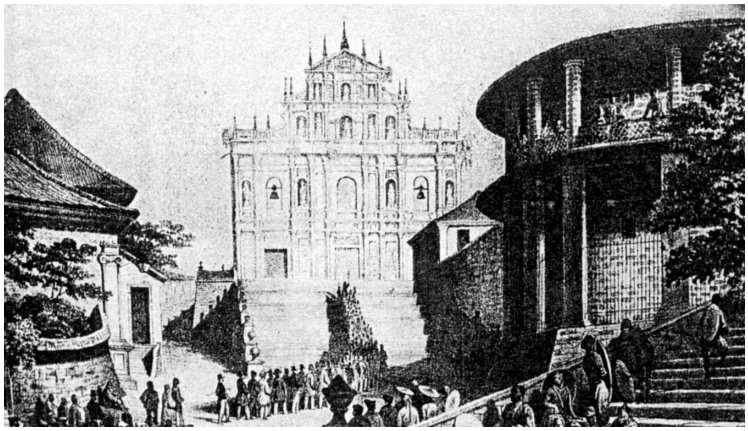
ヴァリヤーノは、こんどイエズス会の総長クラウディオ・アクアヴィヴァの命により、インド管区長に任じられ、当地に残留することになった。ヴァリヤーノに代わって使節一行に同行するのは、サン・パウロ学院の神父ヌニョ・ロドリゲスに決った。

一二月中旬……サン・イアゴ号にて同地を出帆。

一五八四・一月初旬……コーチンに到着。

二・二〇……サンチアゴ号で同地を出帆。コーチン出帆後、数日のあいだ快走した。が、浸水箇所が発見され、その孔口をふさがねばならなかった。神父らが毎日、聖人（サントス）の連禱（れんとう）を唱じている間、使節らはラテン語を学んだ。かれらは毎日三時間娯楽に興じ、その他の多くの時間を、日本語の読み書きとラテン語の学習に費やした。ロドリゲス神父が聖マテウスの福音（エヴァンジェーリヨ）を読んでやると、使節らはそれを熱心に聴き、気に入った箇所を暗記した。

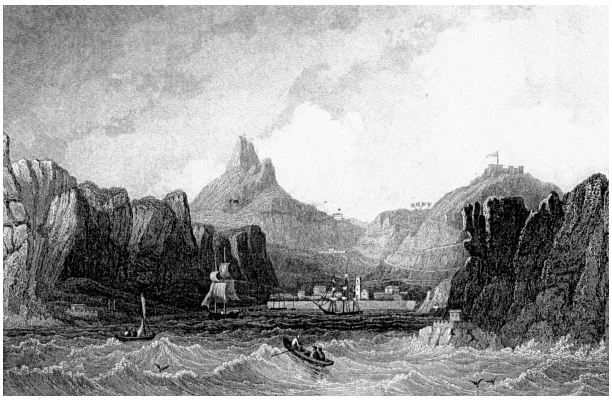
わずかの間にラテン語に著しい進歩をなしたのは伊東満所と原丸知野であった。両者はラテン語で演説文（オラサウン）をつくった。[17]



マカオのサン・パウロ教会と附属の建物。現在、左右の建物はない。

1829年当時のゴアの図。

「サン・パウロ教会」の正面。この教会は1541年にイエズス会の神父らによって建立された。（Alberto C.Germano da Silva Correia: *La Vieille-Goa*,1931）より。



1830年代のセント・ヘレナ島の図。（筆者蔵）

エボラの町の図。（Biblioteca de Evora蔵）

五・一〇……喜望峰を通過。

五・二七……セント・ヘレナ島に到着。島に達すると、他に一隻の船もなかったので、皆々さみしいおもいをしたようである。この島には十一日間停泊し、水と魚を補給した。使節らは娯楽として毎日甲板から釣をしたが、魚影が濃く、たくさん魚がつれた。獲物の魚があまりにも多いため、食傷気味であった。

六・六……同島を出帆。

八・一一……ポルトガルのリズボーア（リスボン）に到着。人目を避けて夕方上陸すると、サン・ローケ修舎（カーザ）（修道院）に入り、ここを旅宿とした。テージョ川の右岸に位置するリズボーアの都市は、甲板からはじめて見る日本少年にとって、驚嘆と歓喜以外の何物でもなかった。数日間、長途の旅のつかれをいやしたのち、イエズス会士をはじめ、オーストリアの大司教なる枢機卿（けい）アルベルトやリズボーアの大司教などの謁見をうけた。

また諸処方々にある修道院を訪問した。

ついでエスパニヤに入り、マドリッドの王宮において国王フィリップ二世の謁見をうけ、このとき日本から持参した三侯の書状を奉呈した（一一・一四）。

一五八五・二・七……アリカンテ（マドリッドの南東三六〇キロ、地中海の港町）を出帆。

三・一……イタリアのリボルノ（フィレンツェの西南西八〇キロ、リグーリア海に臨む港町）に到着した。翌日ピサ（イタリア中西部）におもむき、大司教座聖堂を訪れ、夜はトスカナ大公および公妃を訪問した。のちフィレンツェにおもむき諸処を訪れ、シエナ、カプラローラを経てローマにむかった。

三・二二（金）……夜、ローマに到着。

（天正13・2・21）

全行程二万一千マイル、日本を出帆して以来、約三年一ヵ月目のことであった。使節らはイエズス会の修舎で総長に謁見し、同所に宿泊した。

三・二三……ヴァチカンのサラ・レジアで教皇の公式謁見をうけるために大行列をもってサン・ピエトロ寺院にむかった。中浦寿理安は高熱のため、儀式に参列しなかった。謁見式において、伊東と千々石と原は教皇に三侯の書状（メスキッタ師が訳したもの）を捧呈し、教皇の足に接吻（物足の礼）をおこなった。教皇グレゴリオ一三世は、涙を流しながら三人を抱擁し、それぞれ額に接吻した。

教皇は日本の布教状況などについて質問し、四千スクドを寄進した。[18] またのちに使節からは、信長がヴァリヤーノに贈った安土城と安土町とを画いた二枚の屏風を贈呈した（四・三）。[19]

四・一〇……教皇グレゴリオ十三世の死去。シスト五世が新教皇に選ばれた。[20]

六・四……使節らローマを出発。

（天正13・5・7）

その後、チヴィタ・カステラナ、アシジ、ペルジア、カメリーノ、アンコラ、ペザロ、リミニ（イタリア中北部―アドリア海に面した町）、イモラ、ボローニヤ、フェララ、ヴェネチア、ヴェロナ、マントバ、クレモナ、ミラノ、パヴィアを経て、ジェノバ（イタリア北西部―地中海に面した港町）に至った（八・六）。

八・八……夕方五時ごろ乗船[21]し、イスパニヤのバルセロナを目ざした。

八・一六……バルセロナに到着。

その後、モンセラ、サラゴーサ、アルカラ、オロペサを経て十月初旬ポルトガルに入った。ヴィラ・ヴィソーザ、エボラ（ポルトガル南東部、リズボーアの東一〇九キロ）に着くと、学院内エンリケの館に宿泊した。ついでアルカッセル・ド・サル、セッツバルを経て、十一月リズボーアに至り、ふたたびサン・ローケ修舎を宿舎とした。

一二月中旬……リズボーアを発し、古都コインブラ（ポルトガル中西部―リズボーアの北北東一八四キロ）へむかった。同所の司教

一二・二五……座聖堂を訪れた。イエズス会の学院、各修道院、大学などを参観。

一五八六・一・九……コインブラを出発、リズボーアへむかう。

四・一三……使節一行、サン・フェリッペ号に乗りリズボーアを出帆し、帰国の途についた。

（天正14・2・24）

九・一……モザンビーク（アフリカ南西部）に到着。

一五八七・五・二九……ゴアに到着。一行はヴァリヤーノやインド副王から親しく迎えられ劇的な再会を果たした。

一五八八・四・二二……使節一行と随伴の神父ら、二船に分乗しゴアを出帆。

七・一……マラッカに到着。
八・一一……マカオに到着。急変した日本情勢と接した。三侯のうちの二人――大友・大村侯らの逝去を知った。秀吉の宣教師追放令のために、帰国の便船なく、十八ヶ月間当地に滞在した。
またこの間にジョルジ・ロヨラ神父（日本人）が病いにより亡くなった。
一五九〇・六・二三……日本（長崎）へ帰帆する日が訪れた。ヴァリヤーノ神父はミサをおこなった。使節らは大勢の見送り人とともにサン・パウロ学院を出ると、内海に通じる坂道を下って行った。土色をした入江には、使節一行を日本へ運ぶエンリッケ・ダ・コスタの船が浮んでいた。その船底には、使節らの荷物・献上品・アラビア馬などが積み込まれていた（結城了悟師）[22]。使節らはなわ梯子をのぼり乗船した。
また同行の神父十二名、イルマウン四名はジャンクに乗り長崎を目ざした。
七・二一……長崎に到着。出発以来、約八年五ヵ月ぶりの帰国であった。
（天正18・6・20）
七・二二～二六……神父、イルマウン、印刷機を乗せたジャンクが長崎に到着。

一　帰国後の千々石弥解瑠の動静

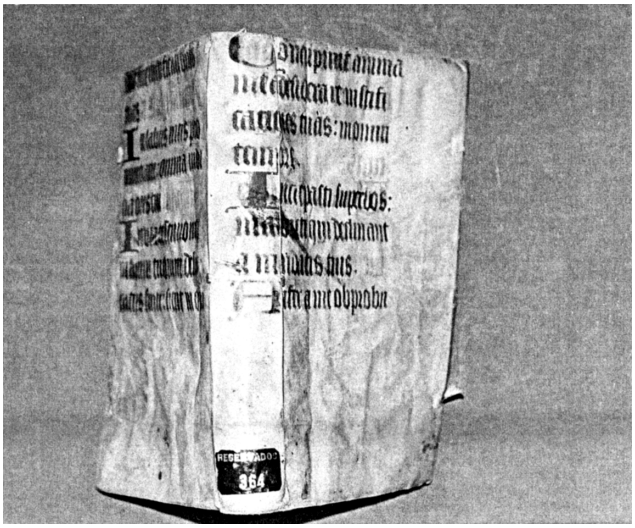
大型の船（ナウ）が長崎に入港した翌日――大村純忠の息子・大村喜前（よしさき）が一族や家臣をともない、縁者の千々石弥解瑠をはじめ、一行の者を見るために長崎にやってきた。またつぎの日には、有馬晴信も大勢の人びとを伴ない長崎にやってきた。

故国を留守にしていた八年半の間に、使節らの兄弟も親戚もおなじように変わっていた。伊東満所や千々石弥解瑠の母たちも、はるばる息子を見るために長崎にやって来たのだが、わが子を識別できなかった。原丸知野や中浦寿理安の兄弟たちも、おのが兄弟の見分がつかなかった。それほど皆、往時と風貌を異にしていた。しかし、使節らは母親や親戚の者からことばで表現できないほどの大きな喜びをもって迎えられた（ドン・ミゲル書簡）。

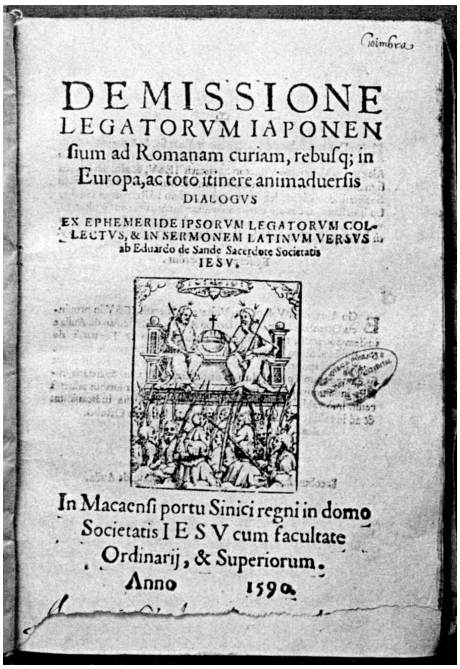
千々石は、中国から日本への航海中、病いのためふせていたようである。有馬晴信（ドン・プロタヂオ）は、ヴァリヤーノや伊東満所らと初対面のあいさつを交したのち、千々石の病床を訪れた。同人はマカオを出帆するとき、マラリヤにかかっていて、まだ全快していなかった。病人と晴信は、三時間ほどくさぐさの話をしたが、晴信は千々石が見聞した数々の事柄、教皇や諸王侯から受けた厚情などを聞くと、羨望にたえなかった。また晴信は一行が

西洋から持ってきた衣服や織物に驚嘆した。

天正十八年七月十日（一五九〇・八・九）の夜――ヴァリヤーノは長崎において種々のことを指令し、決済したのち、四名の元使節らを帯同して有馬にむかった。このころ千々石の病いは回復期にあった。ヴァリヤーノの一行が人が寝静まった夜半、ひそかに有馬（ありま）（北有馬――島原半島南部）に到る手配をしたのは、有馬晴信がかねて望んでいた歓迎の宴を避けるためであった。しかし、ヴァリヤーノがその到着を晴信に伝えるや、晴信は直ちに床より起き、かれに会いにきた。翌日、千々石は晴信に会いにおもむくと、しばらく有馬に滞留するようにいわれた。晴信と妻、姑のみの晩さんに招かれた。



サンデの遣欧使節記の表紙。



Coimbra

DEMISSIONE
LEGATORVM IAPONEN
ſium ad Romanam curiam, rebuſq; in
Europa, ac toto itinere animaduerſis
DIALOGVS
EX EPHEMERIDE IPSORVM LEGATORVM COL-
LECTVS, & IN SERMONEM LATINVM VERSVS
ab Eduardo de Sande Sacerdote Societatis
IESV.

In Macaenſi portu Sinici regni in domo
Societatis IESV cum facultate
Ordinarij, & Superiorum.
Anno 1590.

4使節帰朝の折、ヴァリャーノがマカオにおいて長老サンデに命じて遣欧使節記をラテン語で書かせたもの。（Biblioteca de Evora蔵）。

そのつぎの日、晴信はヴァリヤーノ、有馬にいるすべての神父、四人の元使節らを宴会に招いた。このとき建築中の荘厳華麗なる屋敷を客人らにみせた。晴信はこの家屋を神のために献上したいと申し出ると、その願いは正しいものなので、ヴァリヤーノは直ちにこれを許可した。このときヴァリヤーノは教皇から賜わったケープを着ていた。客人らは室々より外廊まで巡覧した。ついでヴァリヤーノは家屋に香をたき、聖水をまいた。

ヴァリヤーノは有馬に三日滞在したのち、加津佐（現・長崎県南高来郡加津佐町）にある僧院（司祭館）にむかった（フロイス『日本史』）。加津佐の神学校の位置は「水月の海に近い小高い丘で口之津から約半里の所」――すなわち、いまの水月の町のすぐ背後の丘、天辺という所であるらしい。加津佐駅前より町役場の前を通って北へのびる一帯の丘である。丘の高さは約四〇メートル、丘のすぐ下は海である（林田弟壹號著『改訂増補　加津佐郷土史　加津佐史話』加津佐町発行、昭和五十六年三月、七一頁）。四人の元使節らは、ヴァリヤーノに同行せず、しばらく有馬に滞在した。晴信はこの四人のために、二度も歓迎の宴を催した。領民に音曲をもって歓迎の宴に参ずべき旨を布達したため、領民らは新工夫の余興を案じて城にやってきた。晴信もみずから仮装して宴に加わった。やがて四人の青年は、大村喜前を訪ねるために、晴信にいとまを告げた。

加津佐の神学校があった天辺のあたり。（筆者撮影）

ヴァリヤーノは、天正十八年七月十四日（一五九〇・八・一三）加津佐においてイエズス会士による協議会をひらいた。加津佐へは、日本各地にある学院、神学校、教舎、僧院から長老たちが参集した。聖務について、イエズス会と教徒の管理事務に関する重要事項を協議決定した。総会には十三日間、一日六時間を費やした（ポルトガル国アジュダ図書館所蔵写本「四遣欧使節の帰朝」『思想』岡本良知訳）に掲載、昭和2・3）。すなわち、協議会は天正十八年七月十四日から同月二十六日ごろまでつづいた。

同年八月二日（八・三一）ヴァリヤーノは加津佐より長崎へ帰ったが、二十五日間病臥した（「遣欧使節動静表」岡地良知他訳『九州三侯遣欧使節記　続編』所収、東洋堂、昭和二十四年六月）。

有馬を辞した四人の青年は、大村喜前がいる大村（長崎県中部）へむかった。そのとき人びとの希望に従い、同行のポルトガル人も四人の青年

も洋服を用いねばならなかった。喜前は一行を有馬の晴信に劣らぬほど厚遇した。一行は有馬に八日間滞在したが、この間ヨーロッパの話を聴くために各地から人々がやってきた。それより一行は大村を去って長崎へむかったが、そのとき大村喜前は館の人びとと共にかれらを海岸まで見送った（太田正雄「天正年間九州諸大名より羅馬に遣はされたる四青年使者の帰朝」『改造』新年号所収、昭和5）。

四名の青年は、ヴァリヤーノといっしょに大坂に行くことになっていた。ヴァリヤーノはインド副王の使者として来日したので関白秀吉に謁見する必要があった。が、キリシタンに反対の立場をとる者は、ヴァリヤーノは、インド副王の使者などではなく、関白の厚遇をえるために身分を偽称しているのであろう、と誣告した。

秀吉は天正十八年（一五九〇）三月――相模小田原城の北条氏を討つため、みずから三万二千の軍勢をひきいて京の聚楽弟を出馬し、やがて家康が率いる十四万の東海道北上軍と合体し、小田原城を包囲し、北条氏を滅亡させた。秀吉が京都に凱旋したのは同年九月一日であった。ヴァリヤーノは秀吉に謁見する機会にめぐまれず、約半年ほど長崎ですごさねばならなかった。

天正十九年正月（一五九一・一）――ヴァリヤーノと四人の青年らは、日本の統治者秀吉に謁見するために長崎を出発し、都へむかった。千々石弥解瑠は、リスボンのサン・ロケ修舎（修道院）の院長ペドロ・デ・フォンセカ神父に手紙を出しているが――いま私たちは長崎という港におり、数日後に巡察師（ヴァリヤーノ）といっしょに京にむけて出発する、と語っている。上京するのは、関白秀吉にインド総督の使節としてすばらしい献上品を携えてあいさつに赴くためだとしている（一五九〇・一〇・八付＝天正18・9・10）[23]。

閏正月八日（一五九一・三・三）――ヴァリヤーノと四人の青年は、聚楽弟において秀吉に謁見した。巡察師はインド副王の書簡を呈し、アラビア馬・鎧・剣・ピストルなどから成る贈物を献上した。のちに秀吉は、返書とともに甲冑二領・武具式をヴァリヤーノにたくした。

秀吉はヴァリヤーノにはインドの様子を、伊東満所にはヨーロッパの見聞について尋ねた。伊東は当意即妙に答えたので秀吉に気に入られ、家臣になるようにといわれたが、辞退した。秀吉は千々石には、名前や有馬晴信の親類かどうか尋ねた。秀吉はまた四人の青年に西洋の楽器の演奏を所望したが、それが気に入り三度も演奏させた。秀吉はじぶんの目の前でおこなわれるこの小コンサートに満足した（Le R. P. de Charlevoix: *Histoire du Christianisme du Japon*, tome second, Louvain. 1829, p.36）。

インド副王への返書はすぐ出ず、かなりの日数がかかった。秀吉はヴァリヤーノに返書ができるまで、好きな所に滞在してもよい、といった[24]。そのためヴァリヤーノは、随員のメスキッタを京都に留めおいて、四人の青年らといっしょに長崎へ帰ることにした。秀吉はポルトガル船の

来航は歓迎するが、宣教師の入国は許されないといった。[25] ヴァリヤーノら数名の神父の長崎滞在は、黙認され、弾圧も緩和の方向にかたむいた。[26]

ヴァリヤーノは海路大坂から平戸に出、松浦鎮信（しげのぶ）の夫人メシヤ（大村純忠の娘）を訪れたのち長崎に帰り、有馬・大村の諸侯に、教皇シスト五世の返書と贈物の伝達式を荘重におこなった。このとき四人の青年は、盛装して出席し、オルガンその他の楽器の演奏を助け、ヴァリヤーノはミサを唱へた。

天正十九年六月五日（一五九一・七・二五）――四人の青年は、ローマにおいてイエズス会の総長アクアヴィヴァの足許で誓ったように、福音を説くために、天草（河内浦）の修練院（コレジオ）（イエズス会の修道院）においてイエズス会に入った。天正二十年九月四日（一五九二・一〇・九）ヴァリヤーノは、ルイス・フロイスを伴ない長崎を出帆し、マカオへむかった。

文禄二年（一五九三）当時、天草の修練院には三十名以上の修道僧（イルマウン）がいた。四人の元使節は、他の日本人やポルトガル人といっしょに元気に課程を勉強していた。かれらは二年間の修練期をおえ、誓願を立てていた。すべての日本人修道僧は、「霊魂について」（De Anima）や「天球論」（Sphaera）、神学の主な問題の教科書を教わっていた（メスキッタ）。[27] 伊東（二十三歳）はラテン語第一級に、千々石（二十三歳）と中浦（二十三歳）は同第二級に在学していた。原（二十四歳）はラテン語を終了し、現代日本文学を研究中であった。[28]

文禄四年（一五九五）当時、天草の修練院の院長となったメスキッタは、アクアヴィヴァ総長につぎのように報告している。

> 四人のイルマン　伊東マンショ、千々石ミゲル達は元気で、段々、勉強の終了期にさしかかっています。日本語と日本文字の勉強が少し残っています。三人はこのコレジョに滞在していますが、イルマン・マルティノ（原丸知野のこと――引用者）は非常に恵まれている人ですので、管区長と一緒にいて、殆ど手伝いをしています（結城了悟『天正少年使節――史料と研究』［純心女子短期大学、長崎地方文化史研究所、平成四年］、一五二頁）。

秀吉は慶長元年（一五九六）の暮――京阪の地で宣教師六名とキリスト信徒二十名を捕えると翌年の春肥前長崎において処刑した（一五九七・二・五――「二十六聖人の殉教」）。これは日本のキリシタン史上はじめての処刑であった。やがて打ちつづく迫害の結果、天草の修練院は慶長三年（一五九八）十月ごろ、長崎に移転した。

同年（一五九八）の秋――院長兼司教代理のメスキッタは、「四人のイルマン――（伊東）マンショたちは元気でいます。仕事と時間の許す限り、勉強を続けています」[29]とイエズス会総長に報告している。

四人の元使節は、天正八年（一五八〇）有馬の修練院（一五八一年竣工）に入り、ラテン語を学びはじめたが、ラテン語において一日の長があったのは原丸知野であったようだ。かれは語学が達者であったから、後述するように、キリスト教の書物の翻訳に従事した。

ヴァリヤーノは長崎の修練院から若くて優秀な修業僧を六名選んで、中国の阿媽港（マカオ）のコレジオで学ばせるつもりであった。慶長三年（一五九八）当時、長崎の修練院にいたイエズス会員は六十名、その内訳は、神父二十五名、修業僧三十五名であった。[30]慶長四年（一五九九）四月ごろ、千々石弥解瑠はまだまだイエズス会にいた。[31]

慶長六年（一六〇一）伊東と中浦は他十五名の日本人修行僧とともにマカオに渡り、九年（一六〇四）帰国した。このとき千々石はその選にもれていた。慶長十一年（一六〇六）伊東は長崎において副助祭となり、翌年の秋、助祭となった。この年の一月（陽暦）バァリヤーノは、マカオで亡くなった。慶長十三年七月――ついに長崎において司祭に叙せられた。[32]その後、小倉・萩・山口・飫肥（宮崎）・中津などへ布教に出かけたが、慶長十七年十月二十一日（一六一二・一一・一三）長崎の修練院で病没した。享年四十三歳。[33]

慶長六年（一六〇一）から翌年にかけて千々石は、イエズス会を脱会し、名を「清左衛門」と改め、妻帯した。いとこの大村喜前に仕え、神浦と伊木力（旧外海町と多良見町）に食禄六百石をうけていた。慶長十一年（一六〇六）喜前は法華宗（日蓮宗）に改宗し、寺社を復興し、領内のバテレンを追放した。同十二年（一六〇七）清佐衛門もキリスト教を棄てた（大石一久『千々石ミゲルの墓石発見』（長崎文献社、平成十七年四月）、五三～五四頁）。

その後、千々石は大村喜前と不仲になり、殺されそうになり、いとこの有馬殿に身を寄せ、その家臣となった。[34]が、有馬からも追放され、[35]慶長十七年（一六一二）まで長崎で逃亡生活を送ったようである。またルセナ神父は、伝聞として千々石は信仰を棄てたまま元和八年（一六二

26聖人の殉教の図。（Le P.de Charlevoix: *Histoire du Japon*. Librairie d'Éducation de Périsse Frères, 1839）より。

二）から翌年にかけて長崎に滞在していたことを伝えている。[36]

一　千々石はなぜ棄教したのか

弥解瑠は使節に選ばれたときは健康であったと思われるが、渡欧の往還に体をこわしたものか。文禄二年（一五九三）天草の修練院にいたときの健康状態は、「虚弱」（flacas fuergas）とあるという（「イエズス会第一カタログ」一五九三・一・一付）。[37] 健康を害して帰国し、勉学に精を出そうとしても思うように学業が進まない。むかしの仲間の伊東、中浦、原などが神学の勉強のためにマカオに派遣されたとき、千々石はその選にもれた。かれは仲間の好成績と活躍を尻目に、劣等感に悩み、自信を失ったのが主なる棄教の理由であろう。[38]

写本「伴天連記」（編者不詳、慶長十二、三年［一六〇七～一六〇八］の成稿と考えられている）[39] の中に、千々石清左衛門の名が出てくる。むかし神父といっしょにローマに行って、十年間学問をして帰ったが、修業僧のとき、神父の仕打ちに対して不満があり、還俗し、大村侯に出仕した、とある。

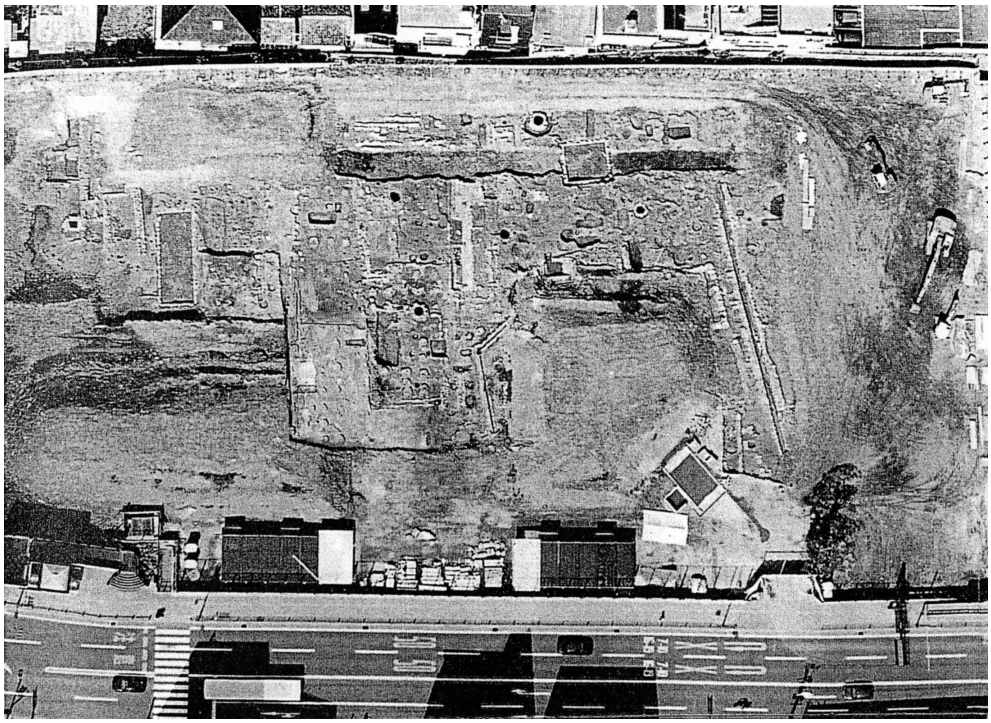
> 然所に（しかし）木村の内にちゞは清左衛門と云侍あり、かの人はむかし伴天連に付（つき従い）良摩（ローマ）に渡り　十ケ年学文して後日本に帰り、エキレンジヤのユルマン（igreja［教会］の修業僧）して居たりしを、伴天連を少うらむる子細有て、寺を出る、大村殿（大村喜前）に奉公す
>
> （『海表叢書　第一巻』、三六頁）。

注・ルビと（　）内は、引用者による。

慶長十七年（一六一二）三月――幕府は禁教令を全国に公布し、京都の南蛮寺は破却された。翌年高山右近らキリスト教徒は、海外に追放された。同十九年（一六一四）幕府は山口駿河守重弘を長崎に遣り、サント・ドミンゴ教会（一六一〇年創建？　旧勝山小学校跡地）などを破壊させた（「長崎畧史　第一巻」）。

元使節のなかでもっとも語学の才があった原丸知野は、寛永六年九月七日（一六二九・一〇・二三）マカオにおいて病死した。享年六十歳。三年後の寛永九年十二月十四日（一六三三・一・二三）――千々石清左衛門は伊木力において亡くなった。享年六十四歳。中浦寿理安は禁教下、潜伏宣教師として十九年間九州各地を布教しつづけたが、寛永十年豊前小倉で捕えられ、長崎に送られ、西坂の刑場で逆吊しの刑（俗に〝穴釣り〟

右端の上－サント・ドミンゴ教会跡から発掘された「金ぱく付瓦質十字架」。右端の下－キリスト教の象徴「花十字紋瓦(もんがわら)」。(「サント・ドミンゴ教会跡資料館」〔長崎〕蔵)。(筆者撮影)



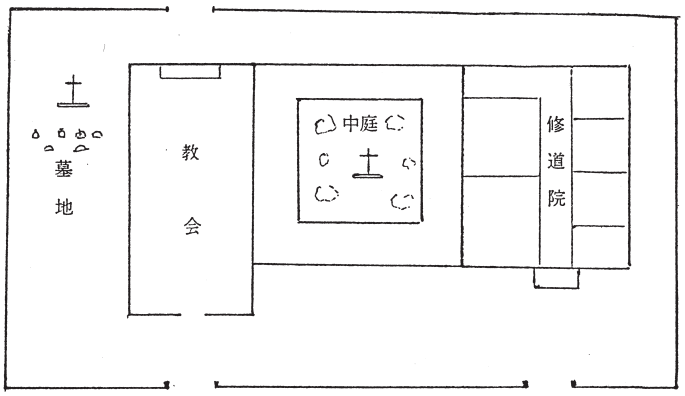
上空から見たサント・ドミンゴ教会（旧勝山小学校跡地）の遺跡全景。『勝山町遺跡－長崎市桜町小学校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（長崎市教育委員会、2003年）より。

という「天主教沿革志」）にあい、十月二十一日（一六三三・一一・二二）殉教した。享年六十四歳。

一　遣欧使節の文化史的意義

四名の少年使節は、これからEuropa（ポルトガル語）という所に行くといわれても、中国やインドといった遠国ぐらいにしか考えなかったであろう。かれらが乗ったポルトガルの異国船の中で、はじめて航海に必要な器具である地図・海図・天測器・羅針盤などの存在を知り、それらが船の位置や進路を測知するための重要な道具であることを識ったことであろう。

ヨーロッパの地を踏んでからは、洋式家屋・道路・交通手段・船舶・火器・河川・港・運河・水門・水道・噴水など、かの地の技術や科学の粋をじっさい目にする機会は豊富にあったであろうが、そういった数多の見聞や実体験はわが国の文化に裨益するところはまったくなかった。しかし、一行が帰国のさいに、ヴァリヤーノの配慮によりヨーロッパから持ち帰った活版印刷機・活字・工具などは、わが国の印刷・出版文化史上ひじょうに有益な影響をあたえた。印刷機の将来は、日本の神学生用の教科書を、また一般の信徒にキリスト教の布教書を印刷するのが目的であった。

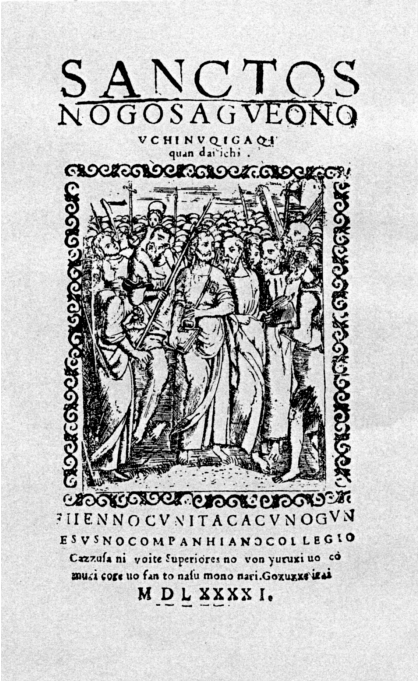


サント・ドミンゴ教会の図。

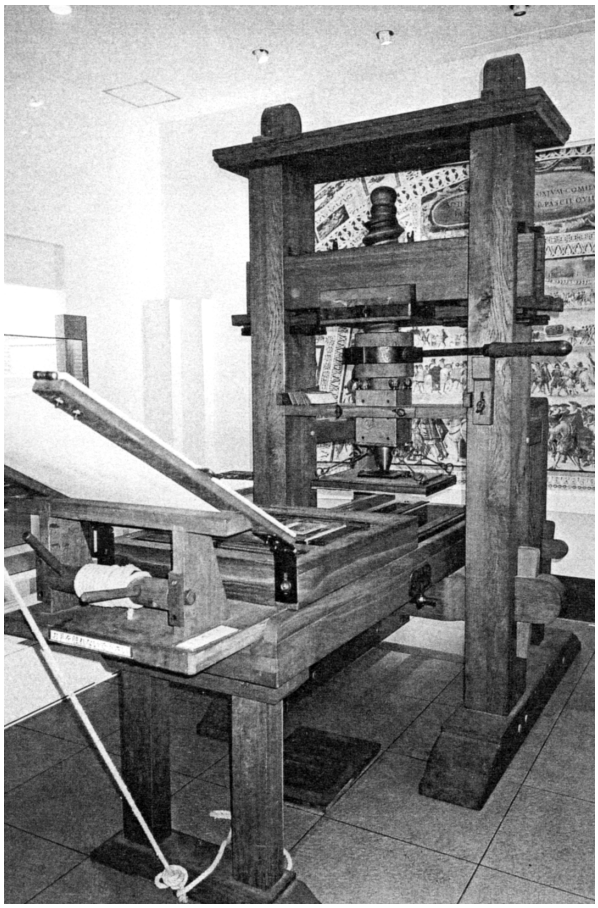
パチェコ・ディエゴ「長崎の教会－1567年～1620年」（『長崎談叢』第58輯所収、昭和50.10）より。

活版印刷術は、活字を組み合わせて印刷する技術であるが、この印刷機械が将来されたことが契機として、以後日本におけるイエズス会の教育機関の印刷所において、いわゆる吉利支丹版の刊行をみるのであるが、日本のイエズス会が刊行した吉利支丹版（ローマ字本十八種、国字本十種）[40]は、こんにち世界の稀覯本である。

ヴァリヤーノと使節一行は、長崎に到着すると直ちに上陸したが、マカオを出帆するときジャンクに積みこんだ印刷機と工具類は長崎で陸揚げせず、ジャンクとともにイエズス会の修練院（コレジオ）がある加津佐（島原半島南端）に運ばれ、そこに荷物は陸揚げされた。[41]加津佐の修練院の附属として印刷所が設けられ、ヨーロッパから連れてきたイタリアの印刷工や日本人の職工の手によって、天正十九年（一五九一）日本イエズス会版の第一書『サントスの御作業の内抜書（ごさぎょうのうちぬきがき）』二巻一冊（総ページ七七一、邦文ローマ字の袖珍本（しゅうちんぼん）、十二使徒や約四十名の聖者伝を列挙し、また殉教の意義な



加津佐の修練院の附属印刷所で刷った『サントスの御作業の内抜書』（1591年）。（Ernest Mason Satow 著 *The Jesuit Mission Press in Japan. 1591-1610,* 1888年刊）より。



復元された活版印刷機。「天草コレジョ館」（天草河浦）蔵。（筆者撮影）

どを説いたもの）[42]が刊行された。

これは小型の八ッ半判（10㎝×16•5㎝）で、活字はジェンソンのローマン体を用い、扉には銅版画が刷りこまれていた。この銅版画は、イエズス会の神学校で訓練をうけた日本人絵師が製作したものだという（E. M. Satow: *The Jesuit Mission Press in Japan, 1591–1610*. Privately printed, 1888）。加津佐のイエズス会の学林で刊行された本書は、現在オクスフォード大学のボドレアン図書館が所蔵している。

この吉利支丹版刊行は、わが国の活版印刷の歴史において画期的な出来事であったが、修練院と印刷所は翌文禄元年（一五九二）天草に移され、ついで慶長三年十月（一五九八・一一）に長崎に移動した。

天草の修練院（コレジオ）の印刷所で刊行されたものは――『ヒデスの導師』（四巻一冊、一五九二年［文禄元年］刊）、『ドチリナ・キリシタン』（一冊、一五九二年［文禄元年］刊）、『平家の物語』（四巻、一五九二年［文禄元年］刊）、『エソポの寓話』（二巻、一五九三年［文禄二年］刊）、『金句集』（一巻、一五九三年［文禄二年］刊）、『アルバレス著　ラテン文典』（一五九四年［文禄三年］刊）、『ランテン

ポルツガル　邦語対訳辞書』（一冊、一五九五年［文禄四年］刊）、『コンテンツス・ムンヂ』（一冊、一五九六年［慶長元年］刊）、『精神の鍛練』（一冊、一五九六年［慶長元年］刊）、『コンペンヂゥム・スピリチュアリス・ドチリネー』（一冊、一五九六年［慶長元年］刊）などである。

慶長三年（一五九八）の冬――天草の修練院が長崎に移ってからは、『サルバトール・ムンヂ』（一冊、一五九八年［慶長三年］刊）や『落葉集』（一冊、一五九八～九九年［慶長三～四年］刊）などを出版した。

慶長四年（一五九九）の二月――当時、長崎の修練院の院長であったメスキッタは、イエズス会総長アクアヴィヴァに印刷活動と四人の元使節の動静について報告している。「四人のイルマン（伊東、千々石、原、中浦）は元気でここにいます」と手紙の末尾で知らせ、また印刷や刊行のようすなども報じている。――長崎に大きな、りっぱな印刷所が設置され、日本人イルマンと同宿たちの尽力でラテン語と日本文字で各種の本が印刷されていること。布教書が刊行されれば、宣教師がいない所にもキリスト教を広めることができること。いま告解のための小冊子が、一五〇〇部印刷ずみであること。そして「現在、和訳されたフライ・ルイス（デ・グラナダ）著の『ぎあ・ど・ぺかどる』が日本語活字で印刷中です」という（結城了悟『天正少年使節――史料と研究』、一五六頁）。

『ぎあ・ど・ぺかどる』を和訳したのは語学にすぐれた原丸知野であった。同書（二巻二冊）はスペイン人ルイス・デ・グラナダの著を訳したものだが、慶長四年（一五九九）正月、長崎において刊行された。日本人が作った邦文鋳造活字（邦字木製活字）を用い、美濃紙に印行したもので草体漢字、平がなまじり文。[43] 大英博物館、パリの国立図書館（下巻）、ローマのバルベリニ文庫などが所蔵しているという。[44]

活版印刷の方法は、――組版をのせた版盤を手で引きだし、インキ・ボールで版面をたたいてインキをつけ、紙（邦字本は美濃紙または半紙を用いた）、紙をその上に置いてから、版盤を圧盤の下に押しこみ、木製のぐるぐるねじれ巻いている螺線棒（らせんぼう）をまわし、圧盤をおろして印刷する幼稚なやり方であった。[45] 印刷能力は一時間に約五十枚であった。

イエズス会の学林で刷られた吉利支丹の印刷物は、五、六十から百種ぐらいと推定されている。[46] 現存するものの数は二十三、四種である。

洋式の印刷術がもたらした文化史的意義は、それがキリスト教の教理や西洋の学芸をわが国に伝えることに一役買ったことである。が、その影響力は必ずしも一般民衆の間に深くしみこむに至らなかった。しかし、日本人のキリスト教への理解を増進させるのに役立ったはずである。

帰国後、四使節らが語る海外における見聞談は、日本国の統治者秀吉や地方大名とその領民らの世界観を一新させ、かれらの蒙を啓（ひら）いたことは疑いのないところである。四使節の海外体験と将来品が、日本の社会や文化にあたえた効果にも無視できないものがある。いったいかれらが日本

から携行したもの、また海外からもたらしたものを一覧表にすると、つぎのようになる。

ヨーロッパの貴顕に贈りものとして日本およびインドから持参したもの。

日本刀　短刀　甲冑　銀盃　屏風　蒔絵の漆器小箱　和書　文箱　和服
和紙　一角獣の角　犀角製飲器　掛布　竹製小箱　硯箱　絵画　傘

インドおよびヨーロッパで受贈し、日本に将来したもの。

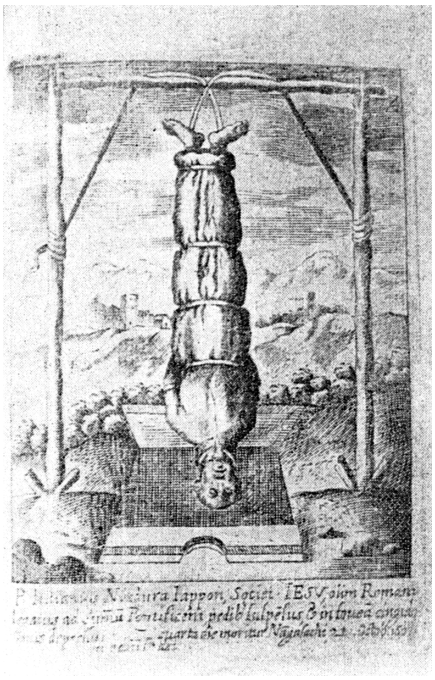
金鎖付の聖遺物箱　掛布（絹と金の交ぜ織り）　聖像　手袋　羊皮紙本
鏡　ミサ及び日禱書　小箱（キリストの磔刑像の入ったもの）　象牙のキリスト磔刑像
大公と公妃の肖像画　長服および短服（グレゴリオ十三世の贈物）　聖物箱　ローマの歴史書
小さい金の十字架　聖母像　象牙の十字架　大鏡四面　ガラス器五〇〇箇
ビロード二反　グラン染織物二反　銃二挺　短刀二振　懸垂自鳴の時計四箇
青銅製砲　剣四振　ローマの市街図
四都市（リズボーア、マドリッド、ローマ、コンスタンチノーブル）の鳥瞰彩色図　地球儀　平面球形図
海図　オルテリウスの世界地図帳　壁掛　ヨーロッパの各都市を描いた書
音楽書　楽器（クラヴオ、懸垂自鳴のアルパ［竪琴］、ラウデ［ギターに似たもの］、ラベキーニャ［提琴の一種］、ヴィオラ・ダルコ［提琴］、レアレジョ［アコーディオン］　アラビア馬四頭（うち二頭は航海中に死んだ）

このうちフランドルの地理学者オルテリウス（一五二七～九八）が作った「世界地図帳」（一五七〇）を基に、わが国において日本本土に若干の修正を加えたいくつかの世界地図がつくられたと推定でき、日本人の世界知識に画期的な進歩が生じたという。また皮相的な一現象としては、ヨーロッパ風の衣服、キリスト教の器物、祈とうことばなどが、長崎はもとより京都の上流階級にまで著しく流行し、青年使節らが演奏する楽曲

が一部の日本人に西洋洋楽に対する趣味を培ったようである（岡本良知『桃山時代のキリスト教文化』東洋堂、昭和二十三年一月、一九二～一九四頁）。

一　伊東満所と千々石弥解瑠の墓

秀吉や江戸幕府によるきびしい禁教令が出たのち、わが国のイエズス会の学林で刊行されたいわゆる吉利支丹版や教会堂、修練院などの建物、キリシタン墓地のほとんどは、その痕跡をとどめぬほど、この地上から消滅した。まことに惜しいかぎりである。ヴァリヤーノに連れられてはるばるローマに赴いた遣使四名の墓の存在もはっきりしな



中浦寿理安の殉教の図。（松田毅一著『南蛮の世界』東海大学出版会、昭和50年5月）より。

い。四名のうちまず伊東満所が慶長十七年十月二十一日（一六一二・一一・一三）長崎の修練院で亡くなった。[47] つづいて原丸知野が、寛永六年九月七日（一六二九・一〇・二三）マカオにおいて病死した。同人の遺体はどこに葬られたのかも定かでない。「マルティノはマカオにおいて日本語を教えた」とある。[48]

千々石弥解瑠（清左衛門）は寛永九年十二月十四日（一六三三・一・二三）伊木力で亡くなった。翌年の十月二十一日、中浦寿理安は長崎で殉教したが、遺体は焼却されたのち、骨灰俵に入れられ海に投棄された（結城了悟『天正少年使節の中浦ジュリアン』日本二十六聖人記念館、昭和五十六年五月、一二五頁）。この四名の元遣使のうち、その墓所ではないかと考えられているのは、

伊東満所
千々石弥解瑠

の二人である。

伊東満所の墓は、従来不明とされていたが、宮崎県日南市楠原の伊東家の墓所にある「禅定尼」の墓を満所のそれではないかと考えたのは高崎

隆男（伊東マンショ研究会会員）である。同氏は満所の墓と考えるいくつかの理由を文章化し、「伊東マンショの墓所について」と題して『日本歴史』（第四二七号、昭和58・12）に投稿した。

帰国後の伊東満所の後半生を略記すると、つぎのようになる。

天正18・6・20……他の三使とともに長崎に到着。
（一五九〇・七・二一）

天正18・7・10……伊東はヴァリヤーノ、他の三人とともに有馬におもむいた。ヴァリヤーノは加津佐にむかったが、伊東らはしばらく
（一五九〇・八・九）　有馬に滞在した。ついで四人の青年は、大村におもむいた。当地において大村喜前の歓迎をうけ、しばらく滞在した。

天正18・8・2……ヴァリヤーノは加津佐より長崎へもどってきた。
（一五九〇・八・三一）

天正19・1・8……伊東はヴァリヤーノらとともに聚楽弟において秀吉に謁見した。このとき秀吉から家臣になるよういわれたが、断っ
（一五九一・三・三）　た。のちヴァリヤーノらとともに長崎に帰った。

天正19・6・5……天草（河内浦）の修練院（コレジオ）においてイエズス会に入り、他の三人とともにモレホン神父について自然科学・心理学・神
（一九五一・七・二五）　学の学習を開始した。[49]

文禄4……伊東は、伊東家十九代飫肥（おび）城初代藩主、祐兵（すけたけ）に招かれ、六〇名以上の家臣に受洗した。[50]
（一五九五）

慶長3・10……天草の修練院は長崎に移転した。伊東は他の三人とともに同地の修練院に入った。
（一五九八・一一）

慶長6……伊東と中浦は、他の日本人十五名とともにマカオに送られ、倫理神学を学んだ。[51]
（一六〇一）

慶長9……マカオより帰国。
（一六〇四）

慶長11……伊東は長崎において副助祭となり、翌年助祭となった。
（一六〇六）

慶長13・8……長崎の「被昇天の聖母」（サン・パウロ）において、セルケイラ司教の手によって司祭に叙せられた。[52] のち、マカオ（一六〇八・九）でアリフォンソ・デ・ルセナと共にあった。[53]

慶長16……祐兵の嫡子・祐慶（二代藩主）は、小倉（細川忠興の城下町）にいた伊東を飫肥城に招いた。伊東は五〇名の家臣に（一六一一）受洗した。

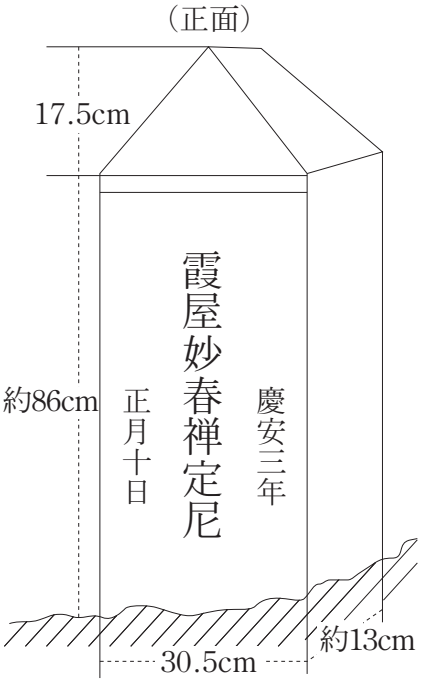
慶長17・10・21……長崎の修練院で病没した。享年四十三歳。（一六一二・一一・一三）

伊東満所の亡骸は、いったん修練院の敷地内にあった墓地または桜町のキリシタン墓地に埋葬されたと考えられるが、同人の墓は慶長十九年（一六一四）長崎奉行の手でこわされ、骨は海に捨てられた。しかし、キリシタン信徒がそれを海から拾いあげ、かれの母親である町上夫人（日向国都於郡城（現・宮崎県西都市）の城主・伊東家十六代義祐の四女、伊東家の支族――伊東修理亮祐春に嫁し、満所を生んだ）のもとに届けた。満所の遺骨は、母・町上の遺言によりいっしょうに葬られたと伝えられている（高崎隆男「伊東マンショの墓所について」）。

満所の母・町上の墓は、宮崎県日南市飫肥の五百禰神社の裏手にある――飫肥伊東家の墓所にある。その墓碑には――

葑月妙𥂴大姉　寿光院殿
寛永元甲子　七月十五日

とある。町上夫人は、陽暦の一六二四年八月二十八日に亡くなっている。この墓のすぐとなりに板状の墓碑（凝灰岩）がある。



天正遣欧少年使節「伊東満所」の偽装墓とかんがえられているもの。

正面にむかって左の墓石は、伊東満所の母・町上のもの。右は「伊東満所」の偽装墓と考えられているもの。（筆者撮影）

この墓碑に刻まれているのは――

慶安三年
霞屋（かや）妙春禅定尼
正月十日

といった法名である。が、これこそ伊東満所の墓でないかという。

しかし、この碑文に該当する人物は、伊東家の系図にも同家の戒名録にも見当らないという。故人（女性）は陽暦の一六五〇年二月一日に亡くなっている。

この墓の主には、系図や戒名録に記載をはばかる事情があったのではなかろうかという（高崎論文）。この墓は、町上主人の死よりも二十五年後に建てられている。

この墓碑に刻まれた慶安三年（一六五〇）正月十日という日付は、満所の弟――勝左衛門の壮大な墓が建てられてから八ヵ月後のことという。同人の妻・正光院（満所のいとこ）や寿光院（藩主・三代祐久（すけひさ）の奥方――満所のいとこ）らは在世中であった。

高崎氏によると、勝左衛門の墓石建立が満所の墓を建てる契機となったのではないかという。しかし、禁教時代であるため、

「禅定尼」を町上夫人のつき人と偽装したものと考えられるという。

禅定尼の墓碑の戒名「霞屋妙春禅定尼」の「霞」の「叚」（叚は叚と考える）は、「假」に通じ用いるので、「霞屋」はキリシタン弾圧下の「假屋」の意を寓するとも考えられるという。

「妙春」は、町上の戒名「葑月妙匳大姉」の「妙」に父・祐青の「青」を付けると、「妙青」となる。この「みょうしょう」という音は、「満所」に近い。これではかなりはっきりするので、「青」を同義の「春」に置き換え、「妙春」と偽装したものではなかろうか、という。

つぎに千々石弥解瑠の墓のことである。その前に帰国後の同人の後半生を略記してみよう。

天正18・6・20……他の三使とともに長崎に到着。
（一五九〇・七・二一）

天正18・7・10……千々石は他の三人とともに有馬におもむいた。しばらく当地に滞在した。ついで仲間とともに大村におもむき、大村喜前の歓迎をうけ、しばらく滞在した。
（一五九〇・八・九）

天正19・1・8……ヴァリヤーノおよび他の三人とともに聚楽弟において秀吉に謁見した。
（一九五一・三・三）

天正19・6・5……天草（河内浦）の修練院においてイエズス会に入り、他の三人とともに神学の学習を開始した。
（一五九一・七・二五）

慶長3・10……天草の修練院は長崎に移転した。千々石は他の三人とともに同地の修練院に入った。
（一五九八・一一）

慶長6……伊東と中浦は、他の日本人十五名とともにマカオに渡った。千々石はその選にもれた。
（一六〇一）

この年から翌年にかけてイエズス会を脱会し、名を清左衛門と改め、妻帯した。大村喜前に食禄六百石で仕えた。のち長崎の替地問題（幕府から長崎外町と浦上との替地を強要された）に端を発し、大村喜前と不仲になり、有馬領に移ったが、そこもおれなくなり、慶長十七年（一六一二）前までに長崎に逃亡した。

慶長11年……イエズス会を捨て、キリシタンの信仰から離れた。
（一六〇六）

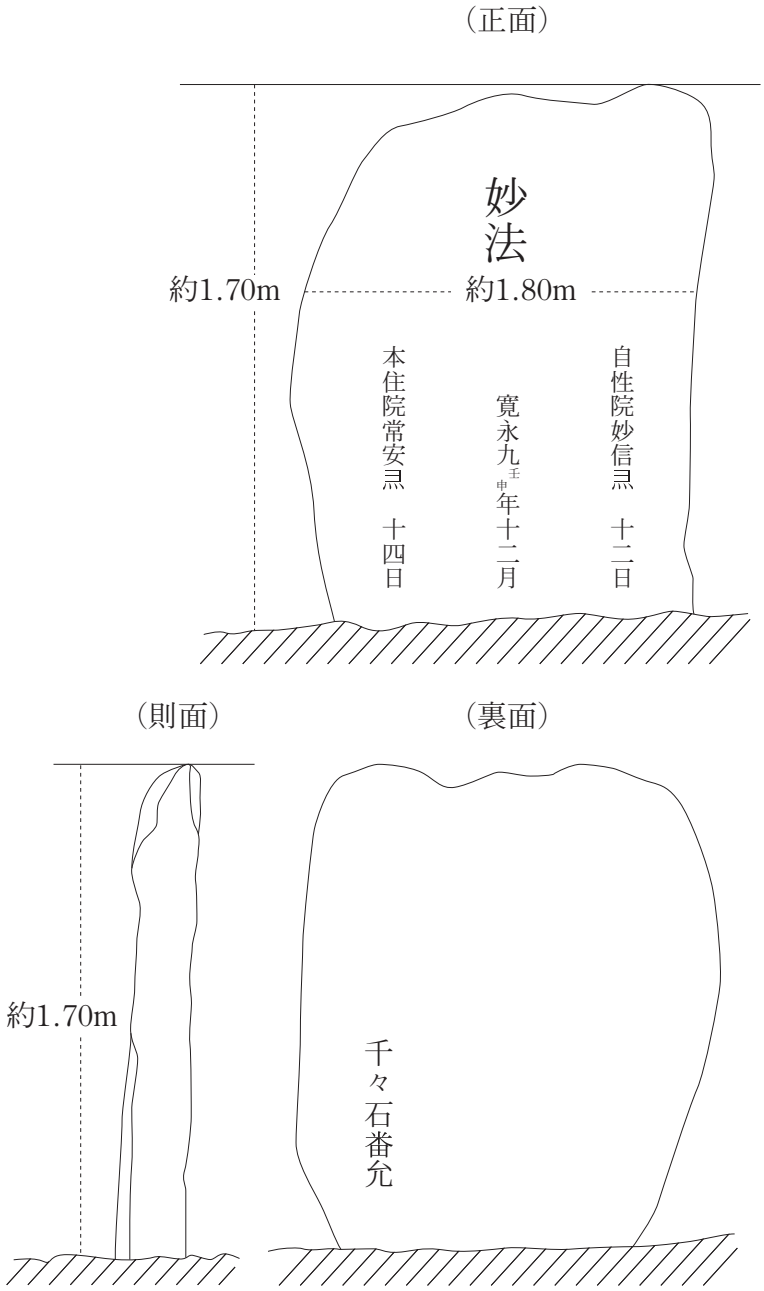
慶長18年……禁教令が全国に公布された。
（一六一三）
慶長19年……長崎の十八ある教会が破却された。
（一六一四）
元和8～9……棄教者として長崎でくらしたようである。
（一六二二～二三）
寛永9・12・12……妻の死去。
（一六三三・一・一九）
寛永9・12・14……千々石弥解瑠（清左衛門）は、伊木力村（現・長崎県西彼杵郡多良見町）で死亡した。
（一六三三・一・二三）

弥解瑠（清左衛門）には妻との間に四人の子息があった。

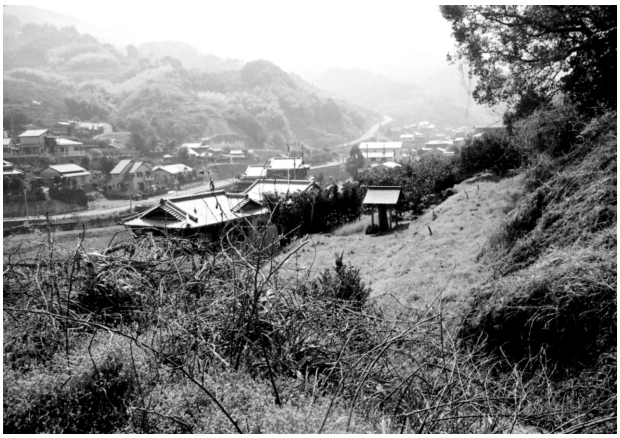
長男　度馬之助……慶長十九年（一六一四）延岡に転封された有馬氏に仕え、六百石を食んだ。のち大村にもどり、戸根村でくらした。
次男　三郎兵衛……早世。没年不明。
三男　清助……大村某の養子となる。
四男　玄蕃……大村家の家臣となる。
同人の長女は、大村藩城代家老浅田安昌に嫁した。

注・大石一久の前掲書（九四頁）より。

大石一久氏によると、長崎県西彼杵郡多良見町山川内郷にある自然石板碑（安山石）が、千々石弥解瑠の墓と考えられるという。この墓を建てたのは、千々石玄蕃允（一六〇六～？）である。「自性院妙信」（女性）「本住院常安」（男性）といった戒名（法号）は、両親のものという。大石氏によると、周囲の目をはばかって、自然石を用いたものらしい。



大石一久氏の発見による、天正遣欧少年使節「千々石弥解瑠」の墓石とみられるもの。



正面の屋根の付いた石碑が「千々石弥解瑠」の墓石とみられるもの。

「千々石弥解瑠」の墓石とみられるもの。（筆者撮影）

あとがき

蔵本のかなりの部分を大学に寄贈したり、捨てて処分したが、まだすこし日本・中国・キリシタン関係の稀覯本をもっている。いずれこれらの本も処分するときが訪れるかもしれない。もう数十年前のことだが、古書で川添重弘著『日本最初の洋行者十三歳の少年大使　伊東満所』（文華堂書店、昭和六年五月）と題する、一八六頁の冊子を求めたことがある。その後、この本を広げてみることもなかったが、最近何気なく手にとり、その装幀を愛でているうちにさまざまな想念が心にうかび、ローマを見た日本青年について何か短いものを書きたい気になった。

わたしは近年、キリシタン遺蹟に興味をもち、これまでに未熟な小論をいくつか発表してきた。ことに天正の遣欧使節に関しては、帰国後の四名の動向――とくにその末路にすくなからぬ関心がありいまに至っている。筆のすさびに、この小論を書く大きなはずみを与えた好書は、結城了悟神父（一九二二～二〇〇八、スペイン生まれ。ディエゴ・パチェコが本名。日本に帰化した）の『天正少年使節――史料と研究』（純心女子短

期大学、長崎地方文化史研究所、平成五年二月）と衝撃的な表題のついだ最近の研究――大石一久氏の『千々石ミゲルの墓石発見』（長崎文献社、平成十七年四月）であった。その他国内外の諸書、論文等に導かれ、キリスト教を離れ、俗人にかえった千々石見解瑠という人物を中心に描くことにし、そのなれのはてについて記したのが本稿である。

しかし、既存の千々石弥解瑠研究に何か新しいものをつけ加えることができたかと問われると、内心忸怩たるものがある。気のむくまま、筆にまかせて書いたエッセイとして受け取ってもらえれば幸いである。

本稿を平成二十年十一月十七日に帰天した結城了悟神父（「日本二十六聖人記念館」館長）に献げたい。

注

（1）「第三章　大友有馬大村三侯の南欧遣使」（『長崎市史』所収、長崎市役所、昭和十三年四月）、一五七頁。

（2）Joseph Jennes C. I. C. M: *History of the Catholic Church in Japan*, The Commitee of the Apostolate Tokyo, 1959,p. 54

（3）浜田青陵「天正遣欧使節の話――特に其の歓迎舞台面に現はれた女性」（『人情地理』第一巻第四号所収、昭和8・4）。

（4）坪井九馬三「大友大村有馬三家使節ゐねちあ（ベネチア）政府へ呈せし感謝状」（『史学雑誌』第一一編第一二号所収、明治33・12）。

（5）松田毅一「天正遣欧使節の真相――特に伊東満所に就いて」（『史学雑誌』第七四編第一〇号所収、昭和40・9）。

（6）大石一久著『千々石ミゲルの墓石発見』（長崎文献社、平成一七年四月）、四三頁。

（7）結城了悟『天正少年使節――資料と研究』（純心女子短期大学　長崎地方文化史研究所、平成五年二月）、一八〇頁。

（8）松田毅一・川崎桃太訳『完訳　フロイス日本史　10』（中央公論、平成一二年一〇）、一二二頁。

（9）「少年使節」（『大分の歴史　第四巻　キリシタン大名大友宗麟』所収、大分合同新聞社、昭和五十三年八月）、二四〇頁。

（10）松田毅一・佐久間正編訳『ヴァリニャーノ　日本巡察記』（桃源社、昭和四十年三月）、五三頁。

（11）注（9）の二四一頁。

（12）J. B. Braga, Macao: *Brief Notes The Panegyric of Alexander Valignano, S. J.* (Reproduced from an Old Portuguese Codex), Monumenta Nipponica, Sophia University, vol.V. 1942, p.524

（13）村上直次郎「大友有馬大村三侯の西伊遣使に関する新史料」（『史学雑誌』第一四編第三号所収、明治36・3）。

(14) 海老沢有造「天正遣欧少年使節」(『日本歴史』昭和35・10)、五六頁。
(15) *La Première Ambassade du Japon en Europe 1582-1592* Première partie Le Traité du père Frois (Text portugais) Ouvrage edité et annoté par J. A. Abranches Pinto, Yoshitomo Okamoto, Henri Bernard S. J. Sophia University, 1942, p.xv
(16) 同右, p.xvi
(17) 注(15)の二四頁。
(18) 注(9)の二五〇頁。
(19) 注(9)の二五一頁。
(20) 注(15)のp.xix
(21) 注(15)のp.xxi
(22) 注(7)の九二頁。
(23) 注(7)の一〇三頁。
(24)『長崎と海外文化』(長崎市役所、大正十五年四月)、三五頁。
(25) 注(9)の二五二頁。
(26) 同右。
(27) 注(7)の一四七頁。
(28) 宮崎賢太郎「天正遣欧使節の人物研究」(『長崎談叢』第六八輯所収、長崎史談会編、昭和59、4)。
(29) 注(7)の一五五頁。
(30) 注(7)の一五六頁。
(31) 注(7)の一五七頁。
(32) 注(28)の論文参照。
(33) 同右。
(34) ヨゼフ・フランツ・シュッテ編 佐久間正、出崎澄男訳『大村キリシタン史料 アフォンソ・デ・ルセナの回想録』(キリシタン文化研究会、昭和五十年十一月)、二〇二頁。
(35) 注(28)の二九頁。
(36) 注(34)におなじ。

(37) 注（28）の二六頁。
(38) 注（28）の二九頁。
(39)『海表叢書　第一巻』（更生閣書店、昭和二年十一月）。新村出の「解説」（一七頁）を参照。
(40) 新村出著『日本吉利支丹文化史』（地人書館、昭和十六年五月）、八三頁。
(41) 川田久長著『活版印刷史　日本活版印刷史の研究』（印刷学会出版部刊、昭和二十四年三月）、四四頁。
(42) 海老沢有道著『切支丹典籍叢考』（拓文堂、昭和十八年五月）、四二頁。
(43) 注（41）の五〇頁。
(44) 注（40）の一二七頁。
(45) 注（41）の五六頁。
(46) 新村出著『吉利支丹研究余禄』（国立書院、昭和二十三年四月）、八九頁。
(47) 注（28）の二四頁。Crassetは、伊東満所の没年を一六一一年としている。「グレゴリオ十三世に忠順を誓うためにローマに赴いた日向王国の伊東マンショ神父は、一六一一年に亡くなった」（Tome second, p.200）。
(48) Fr. Manuel Teixeira: *The Japanese in Macau*, Instituto Cultural de Macao, 1990, p.18
(49) フーベルト・チースリク著『世界を歩いた切支丹』（春秋社、昭和四十六年六月）、一〇五頁。
(50) 高崎隆雄「伊東マンショの墓所について」（『日本歴史』第四二七号所収、昭和58・12）を参照。
(51) 注（49）の一〇五頁。
(52) 注（34）の三七頁。
(53) 注（49）におなじ。